

— 随想あれこれ —

## 新元号「令和」に決まる

土田 良吉

四月一日「平成」に代わる新しい元号は「令和」に決った。・国書に由来する初めての元号といながら、国際性も宿している。人々が心を寄せ合って、〈好き、やわらかな世〉を作ってゆく。この理想は世界一円に通じよう。新天皇となられる皇太子さま、雅子さまによく似合っている。・（読売新聞・編集手帳より）

テレビは数時間にわたって時の流れを交え新元号への希望を流した。大正期生まれの吾は昭和・平成・令和へと四代の天皇を戴くことへの歎びに感極まった。いやおうなしに辛い敗戦の悲劇を引きずってきた吾、一番長かった終戦当時の思い出にタイムスリップ。

忘れられない事実を書き留めたい思いに駆られ、一筆啓上と相成った。

(一)

昭和二十年八月十五日、日本軍の全面降伏以降におけるソ連軍の千島列島侵攻・スターリンの北海道北部占領の野望のことである。

終戦直後の八月十八日、航空師団から復員しようとしていたとき、鈴鹿市で列車に乗るまで幾度も

「北海道はソ連との戦場になるようだ。その上、連絡船も全て壊滅した。海峡を渡れない。帰るのは暫く待て、俺の家に泊まれ…」と地元出身の戦友に強くたしなめられたが、運良く青森港で軍人専用の輸送船に便乗できて無事帰郷が叶った。

今、思えば、乗船していた将校以下千名近い兵員は銃こそ持つてなかったが、統制のとれた規律ある部隊だった。お前達はイイナーと我々復員兵を見回していた。この時、わが北部軍はソ連との臨戦態勢を覚悟していたという。この船の兵員は万々に備えるべく北上中の戦闘要員だったと思う。既に、ソ連機動部隊は留萌沖にあつて、本道攻略を今や遅しと待ち構えていたというから正に危機一発の恐るべき

事態だった。

偶然にも、当時を語る得難い名著矢野牧夫氏による第26回北海道ノンフィクション大賞「1945夏スターリンの野望〜北海道北部を占領せよ」にめぐり合えて、留萌沖の悲惨な3船遭難事件の謎を解明する上での決定的な資料になった。次はその抜粋引用である。

八月十九日にソ連艦隊司令部から潜水艦に出された指令書に示された実に驚くべき次のような項目があった。

(1)ソ連第2極東軍は北海道北部を占領する任務を負っている。

(2)八月二十四日未明、狙撃師団は留萌沖に上陸する予定である。

(3)そのため2隻のI型潜水艦を指定海域に派遣せよ。

(4)2隻の潜水艦は1945年8月19日19時に出港とする。

(5)配置に就いた潜水艦は留萌沖付近を航行する敵の船舶をすべて撃滅せよ。

である。

当時、大本営が北海道の師団に発令した稚内・留萌・小樽への部隊出動は極めて当を得た措置であったことがわかる。

ウラジオストク軍港から出撃した2隻のソ連潜水艦は、日本海——留萌沖海域に向かい課せられた「航行中の船舶はすべて撃沈せよ」との命令を忠実に実行した。その海域を樺太から南下して来た無辜の引き揚げ3船が無惨にも標的にされてしまった。

引き揚げ船は小笠原丸(1, 493トン)、第2新興丸(2, 500トン)、泰東丸(2, 880トン)の三隻であった。

8月22日早暁、小笠原丸は突然、濃い霧のなか魚雷攻撃をうけ満員状態の避難民を乗せたまま轟音と共に沈没してしまった。みんな眠りのなかであつて、かろうじて脱出できたのは総員702名の内、生存者61名に過ぎない。

続いて第2新興丸が魚雷攻撃を受けた。魚雷は船倉付近で爆発し多数の引揚者を殺傷した。しかも、すし詰め状態で収容されていた大勢が船倉に開いた

爆裂孔から海に投げ出された。狙った目標が沈没を免れたのを知った敵潜水艦は浮上して甲板から銃砲撃を加えはじめた。さらに飛行機も空からの機銃掃射を浴びせ、避難民は空と海からの執拗な攻撃に遭った。沈没は免れたものの乗船者約3,600名中、死亡者400名ほどに達した。

午前十時ころ、3隻目の泰東丸が海中に潜伏していた潜水艦からの魚雷攻撃をうけたが艦長の発見が早く、間一髪で回避する事ができた。こちらが無防備を知った潜水艦は浮上しながら砲撃を浴びせてきた。甲板に出て助けを求める乗船者は狙い撃ちされて次々となぎ倒された。艦上に大きな白旗を高く掲げたのだが、銃砲撃は執拗に続き、遂に船体の損傷激しく沈没する事態となってしまった。夕刻になって、かろうじて漂流をつづけていた人々が友軍の艦艇、高栄丸、石崎などによって好運にも救助されたが、乗船していた780名のうち、生存者は僅かに113名に過ぎなかった。

天皇の終戦宣言があつて一週間が経つと言うのにこの衝撃的な事実は、誰もが信ずることができな

った。情報管理体制が徹底していなかったため事件の発生や、その意味などについて殆ど知らされないままに歳月だけが過ぎてしまった。次は、この参考著書の中にある挿話で、大湊港基地に引き返す途中の艦隊員の口述で惨状を伝えて余りあります。

#### Kさんの話

…午後3時過ぎだったと思います。船の進行方向に黒々とした可なりの量の浮遊物が浮いているのに出会いました。これほどの大量の浮遊物を見たことはありません。気が付くと中にまじって沢山の人が死んで浮んでいます。私は「ああーっ」と思いました。初めは何が起こったのか、どうしたのかまったく分かりませんでした。すごく静かな海の上だったのですから…。

#### Tさんの話

浮流物に出会ったのは甲板に上がったときでした。近づくくと、船体の破片や大小のさまざまな木片、梱包したままのたくさんの荷物、ばらばらになった着衣類、ひもで縛った行李や布団袋などが広い範囲に浮んでいるのです。それはひどく無惨な光景でした。

目をこらしてみると小さな子供さんがリュックを背負ったまま仰向けになって息絶えて波間に浮んでいるのです。なかには木材に掴まって手を振って助けを求めている人が何人か見えたんですよ。艦長はいち早く船の停止を指示しました。この時、意外にも船のすぐ近くに怪しい潜水艦が潜んでいるのを音響班が探知機で掴みました。おそらくこの潜水艦が襲撃したのだらうと思いました。もう戦争は終わっているはずなのですが何としたことか……。このままだと我高栄丸も魚雷攻撃を受ける恐れがあるということ。艦長は即座に攻撃命令を出し、海の中に居る潜水艦に対して「爆雷」5発を投下しました。以上

この留萌沖での「3船遭難事件」は、単なる偶発事故ではなかった。それは留萌港上陸を企てたソ連陸海軍の正規な軍事作戦の一端であった。スターリンは北海道北半分を奪取し、領土拡張の野望を満たすべく予てから周到な準備を進めていたのである。

時に、ソ連占領軍の司令官がマッカーサーに北海道占領の合意を迫った。マッカーサーは一蹴した。

「もしソ軍が一步でも北海道を攻撃占拠したら我々

連合軍は東京のソ連軍人の全てを逮捕、投獄する」と、

この気迫にソ連軍は艦隊を退去せざるを得なかった。もしソ連の思う壺に嵌まっていたら北海道の命運は朝鮮半島の悲劇に重なる。思うだに身の毛がよだつ。なお米軍は沖繩を占領する一方で、ソ軍の千島侵攻に甘んじた戦略は惜しまれてならない。

## (一)

次は、一九四五（昭和二十年）九月六日、米政府の、「マッカーサー元帥への通達」の中の一項である。

「天皇及び日本政府の国家統治の権限は、連合国最高司令官としての貴官に付属する。我々と日本との関係は、契約基礎の上に立っているのではなく、無条件降伏を基礎とするものである。貴官の権限は最高であるから、貴官はその範囲に関しては、日本国からの、如何なる異論も受け付けてはならない」

ここにあるように、マッカーサーに与えられた権限は絶大なものだった。彼の最大の狙いは、徹底的に日本を民主化すること。直ちに連合国は矢次早に民

主化政策を強行し、日本政府は、大いに戸惑い試行錯誤に陥った。ロバート・シャーロットは、その著書「太平洋戦争」の中で、こう述べている。

「いまこそ日本人は、只、彼ら自身の実力と熟練と、更に旺盛な精力のみを以って、それに彼らの旧敵国より差し伸べられる援助の手をかりて、その祖国を再建せねばならないのである」

と、全く無力そのものになった敗者に対する憐憫と激励なのか、それとも人道的なイタワリを述べている。さらにロバートは「神風特攻隊は米兵を最も恐れさせた。こんな命知らずの敵と戦うのは凝り懲りである。米国民が厭戦気分になるのを恐れて数ヶ月間、国内の新聞報道をさし止めていた程である。勇敢な戦死を遂げた日本軍将兵の崇高な精神に対して、世界中は賛辞を惜しまなかった。将来にわたって日本民族を高く評価し続けるだろう」と付け加えた。

日米講和条約のあと当時の吉田首相は「戦争では負けたが、外交では勝った」と胸を張った。それこそ、名実ともに旺盛な精力を以って戦後の大復興を成し遂げた日本人の根性の表れであり、特攻精神の

発露そのものだったのかも知れない。

日本の戦後復興の早さは、世界の七不思議とさえ言われて平成の時代に遷った。これらの一貫した史実の体験者は我々の年代で終わるが、一方で、真実を引き継ぎ後世に残そうとする若いグループが増えていることは頼もしい限りである。

或る経済紙で胸のすくような記事を読んだ。

『今でも、我々民間人はアメリカを相手に一対一で勝負しているのに、役人と政治家は、相変わらず元気がない。戦争に負けた国は、戦争に勝つまでは駄目だ、とでも思っているのだろうか。戦勝国に対して、政治家や役人は全く頭が上がりないからである。日本人がもっと元気を出す方法は、アメリカ大統領に第二次世界大戦はアメリカが悪かったと日本に謝らせることだ』と。又、《正義の国アメリカが原爆を落としたのは悪い。それに戦勝国が負けた国を裁くのも間違っている等々。世界中の世論を浴びて、彼ら自身がそれを認めざるを得ないようにすることで決まる。二〇〇五年までには謝らせることが出来ると思う。これは決して暴論ではない。何故ならア

アメリカは世界中から流れ込んだマネーの虚業で繁栄を続けているが、米国市場は弱肉強食を第一義にしており自然の摂理に反する。彼らの言うグローバルスタンダードは、そろそろ化けの皮が剥がれるに違いない。やがて、ジャパニーズスタンダードが訪れる日は、そう遠くはない」と、前屈みの若い経営者たちを勇気づけた。

戦後の渦の目だった冷戦に、終止符の役を果たしたアメリカ元大統領レーガン氏が天に召された。

### (三)

昭和二十六年の朝鮮戦争はソ連・中国の参戦もあって、朝鮮半島は二百万人もの犠牲者を出す修羅場と化した。反共に徹したマッカーサーは核使用を提案した。彼は本国首脳の戦火不拡大の決断により、司令官を解任された。「老兵は死なず消えるのみ」の言葉を残して本国に帰った。忌まわしい三十八度線は半世紀以上経っても半島紛争の火種のまま・・・。  
驚いたことに、世界中がイラク復興について小泉首相の役割を問いはじめたこともあった。

アメリカでは大統領選挙でパワーが爆発・激突。

トランプ大統領の舵取り次第で世界の常識が変わりゆく新時代に入った。平和を願って戦うは人類最大の愚、挑発、報復、殺戮の繰り返し、あつてはならぬが現実にはさにあらず。国際環境は見逃せない。

「栄光盛衰は世の倅い」

「禍福は糾あひまえる繩の如し」

「山高ければ谷深し」

言葉の重さをかみしめ九十四歳を一步步々踏み続けてきた吾。

次代の「令和」に更なる希望を！

沈着に激動を乗り切る覚悟も！

身命を賭し、国に殉じた同胞の犠牲に礼拝を！！

自分なりに、しかも極めて断片ながら辛く長かつた終戦当時の一端に触れてみました。

微意をくんで頂きたい！！